

月例研究発表要旨

第192回 1998年5月6日
「中国先秦時代のコト類について
——孔子は琴を弾いていなかった」

吉川良和

わが国では、共鳴箱（板）の上に糸を横に張り、その弦を鳴らすものを〈コト〉と称している。それに当たる漢字が一定していないのは、コト類に対する区別が古くからないからである。先秦中国においては、コト類に属する楽器として、ほぼ5種類を挙げることができる。琴、瑟、箏、筑、臥篋篋である。その簡単な相違は、以下のとおりである（弦数に出入がある）。標準の琴は黒漆塗り、7弦、無柱。瑟は無漆、25弦、有柱。箏は無漆、13弦、有柱。筑は5弦、打奏。臥篋篋はハープをねかせて下に、共鳴箱を当てたもの。このように、古代文献から、定義できる。こうしたコト類の具体的な諸処の問題点は、時間の都合で指摘できないので、そのうちの琴を取り上げた。それは、琴が儒家思想の祖・孔子に愛されたと司馬遷の『史記』などにおいて、歴代儒者、文人からなどから「琴楽」「琴学」と特別視され、独得の琴譜なる手法譜をもっているからだ。だが、近年の出土楽器から見ると、二千年以上も前の典籍とはいえ、誤りもあるのではないかと思ったので、卑見を述べて大方の高見を乞うた。

近年の出土楽器に対する報告や分析が、九十年代になって少なからず出た。楽器とおぼしき物が出土すると、その形状を古代

文献と照査し、最も近似する楽器名をさがしだす。次にその楽器の各部の形状、寸法や材質などを調べる。当然、文献と異なる部分があったり、書かれていないこともあるわけだからそれらを指摘しながら、確定後の楽器名が包含する範疇の内容を充実させ、時に修正するのである。

琴を考える上で、重要なコト類は瑟である（孔子の時代にはまだ他の3種は流行していなかった）。瑟は普通25弦で柱が低かったから、左手で押しでもさほど高い音は得られず、2m近くあり、弦長も長くてせいぜい半音しか上がらなかったろう。近年、いわゆる「楚瑟」が出土して、25弦は外9弦が内9弦とほぼ同じ位置に柱が立てられ、中7弦の第1弦が最も低音となり内9弦と合わせて16弦、音階順に上がっている。半音のない5音音階であり、3オクターブの音域をもっている。漢代、馬王堆漢墓より出土した楚瑟は、さらに重要な事実を備えていた。それは、弦の太さが違うことである。同じ弦長でも、弦の太さが太いと出てくる音は低く、細いと高い。

さて、この瑟と比べて琴がまさってこそ、楽器の中の最も優れた物（桓譚『新論』）、「人の心を正し」（『白虎通義』）、君子の楽器（『風俗通義』）となり、孔子の弾じ愛する楽器にふさわしかったわけであろう。瑟は同じ太さの弦でも柱を動かして自由に音高がとれる。ギターのフレットのはたらきをしているのである。つまり、柱を右に寄せれば弦長が短くなり、高音が得られる。柱を左に立てれば弦長が長くなり、低音が得られる。瑟の利点は、とくに柱で高音が得ら

れ、しかもその音が共鳴箱に伝わって増幅するという弦楽器の弱音を補強できるころにあった。一方、弱点は1弦で1音からせいぜい2音しか得られないことと、後世では、中国語の抑揚に合わせて音に抑揚を付けられないことにあった。

これに対して、琴の優位性は、柱を立てず、平らな琴面を指で直接押さえて、1弦から自由に音高がだせ、左右に音を上げ下げして抑揚を付けることも至極容易な点にある。柱がないだけ、1弦で4オクターブ余の音域が得られ、ハーモニックスもできる。これが7弦あるから、瑟に比べ音域が広い。しかし、こうした奏法が可能になるには、重要な2条件が必要となる。すなわち、琴面が平らで滑りやすいように漆を塗っていること。そして、順に弦の太さを細くしていかなければならないことである。糸の撚りを多くして太くし、一番太いのを1弦とし、一番細いのを7弦にする（江戸の碩儒・荻生徂徠の『琴学大意抄』に弦の撚りを詳述しているのは、やはり徂徠の慧眼であった）。さもないと、高音弦をよほど強く張らないと求める音高に達せず、高音弦が低いと低音弦はゆるすぎて音が出ない。

漆塗りのコトの最古の物は、曾侯乙墓10弦で前5世紀だが、琴面は平らでないから、指で琴面を押さえたとは考えられない。ただ10弦の糸の太さをなんとか違えて高低音高をとり、右手だけで弾奏していたと考えられる。前6世紀の孔子が、琴を弾くにはこの二つの条件を充たさなければならないが、先秦時代の文献で琴がもてはやされたという記事はほとんどない。『論語』すら琴の文字は一字もなく、瑟のみである。琴の文字は〈琴瑟〉の連語で用いられるこ

とが多い。漢代、急に琴が突出してもはやされ、挙げ句のはてに孔子が文王の作を弾いたなどとしたのは、楽器としての琴の2条件がととのい、奏法が発達してから、反対にその価値を高めるために古代の聖人に仮託したり、神聖化しようとしたからであろうと考える。

当日は、出土した琴、瑟の細かい部分的考証もしたが、紙幅の都合で割愛した。

第193回 1998年7月8日
「テキストにおける指示詞
の機能と『は』と『が』の
選択の相関について」

庵 功雄

助詞「は」と「が」の対立についてはこれまで数多くの研究があるが、その大部分は文レベルの考察である。一方、テキストレベルでの両者の使い分けについて論じたものの中には次のような記述が見られ、これが一般的な理解であると思われる。

- (I) a. 主語が前に出てきた名詞と同じ名詞であり、その名詞について何かを伝えたいときは、主語に「は」を付ける。
b. 主語が前に出てきた名詞を指す名詞「彼」「彼女」「この～」「その～」などであり、その名詞について何かを伝えたいときは、主語に「は」を付ける。

しかし、こうした記述には次のような体系的な反例が存在する。

- (1) 順子は「あなたなしでは生きられない」と言っていた。その順子が／？？は今他の男の子供を二

人も産んでいる。

- (2) 田中君は水泳で国体に出たこともある。その田中君が/*は川で溺死してしまった。

こうした例で下線部の例はテキスト内に既出であるにもかかわらず、「は」は使えず「が」を使わなければならない。

実際にテキスト内での「この」と「その」の使用頻度を調べてみると次のようになる。

	は		が		合計	
この	321	75.0%	107	25.0%	428	100%
その	58	32.8%	119	67.2%	177	100%
合計	379	62.6%	226	37.4%	605	100%

〈資料〉

「天声人語」1985年～1991年の全用例

$\chi^2=95.5$ (99.9%水準で有意)

このような分布が見られるのは、1)「この」が「その」よりも機能的に無標である、2)「は」が「が」よりも無標である、という二点から説明できると思われる。

まず1)に関して言えば、「この」は、a) 言い換えがある場合、b) 遠距離照応の場合、c) テキスト内での限定が少ない場合、のいずれにおいても使うことができるが、「その」はこれらの環境で使うことができない。このように、「この」と「その」の間に差異が見られるのは、両者が次のような機能を担っているためであると考えられる。

- (II) a. 「この」は、話し手／書き手が先行詞をトピックとの関連性という観点から捉えていることを示すマーカーである。
b. 「その」は、話し手／書き手が先行詞をテキスト的意味の付与という観点から捉えていることを示すマーカーである。

一方、2)に関して言うと、(1)や(2)のように、テキスト内で繰り返して使われた名詞句が「が」でマークされるのは、「が」を含む文が先行文に対して逆接的な意味関係にあるときに限られる。一般に、連文間の意味関係として「逆接」は「順接(非逆接)」に対して有標なものであると考えられるので、そうした場合にしか使うことができない「が」は「は」よりも有標な機能を担っていると考えられる。

以上を総合すると、テキスト内で二度目以降に言及された名詞句をマークする手段としては、「この」と「は」の組み合わせは無標なものであり、「その」と「が」の組み合わせは有標なものである。なぜなら、こうした環境においては、「この」は「その」より無標であり、「は」は「が」より無標であるからである。従って、上表のような分布が見られるのは、こうした機能上の有標性が反映した結果であると解釈することができる。

第194回 1998年11月25日
「一橋大学中国語学研修旅行
の現状と課題」

笹倉一広

歴史：

一橋大学中国語エリアでは、1990年に中国での短期語学研修旅行を開始した。爾来、夏休みの北京の對外経済貿易大学での研修は9回、93年より始めた春休みの上海財形大学での研修は3回を数える。両大学は本学の姉妹校である。

形式的には国立大学の責任問題もあり、委託した旅行社主催の民間語学研修ツアー

に学生が個人の資格で参加する形式をとっている。中国語エリアの教官が一人同期間同大学に滞在する。

参加人数は、開始から5回までは30~40人。6回以降は春夏に分かれ、合計で30人程度である。近年中国熱の低下に従って参加人数も減少の傾向にある。また、このところ1年生の割合(70%)、女子の割合の増加(この夏では半数以上)が著しい。

研修内容：

かつては午前中授業の4週間のプログラムであったが、効率化を計り、現在では月~金午前午後3時間ずつの授業で2週間のプログラムである。土日は先方大学の手配による北京の観光(盧溝橋・故宮・長城・明十三陵)や自由行動に当てられる。また平日の晩も京劇・雑技の観賞や如水会北京支部との交流などがあり、なかなかのハードスケジュールである。語学研修終了後、2泊3日のポストツアーがあり、ほとんどの学生が参加する。今回の場合は大同であった。

授業は初修者、既修者それぞれ10人以下の小人数クラスで行われる。もちろん一橋生だけの編成である。いずれの場合も中国人教師(外国人教育の専門家)により中国語のみで行われる。教材も同一の会話主体のテキストを使用するが、進度が異なる。最終日に修了試験が行われ、及第者には修了証書が授与される。使用されるテキストは日常会話中心に編集されたもので、英語で語釈と簡単な説明がついている。

生活：

学生は大学付近のホテルに滞在する。日本のビジネスホテルレベルのツインルーム

を使用する。そのため、机や照明などの設備は勉学に十分とは言えない。朝食は支給の食券でホテルの食堂でとるが、昼食・夕食は自弁である。中国語を話さなければ食事にありつけないのである。

学生の一日は7時頃起床、朝食。8時半から11時半まで午前の授業。学食で昼食昼休み。1時から4時まで午後の授業。復習、夕食、自由時間といった具合である。

健康面では、初めての中国のこともあり、全員が一度は下痢と風邪(発熱)を経験する。北京の場合、近くに中日友好病院があり、何人かはそこの世話になった。盗難など犯罪被害にあった例は今回はなかった。

研修の効果：

効果を具体的に計ることは難しく、また、具体的な追跡調査はしていない。1年生クラス制の授業の中で、参加した学生は特に聞く力が伸びたように感じられる。2年生では、中国人教師の授業が聞き取れるようになったという学生もいた。また、例年この短期研修に参加した学生から中国に長期留学する者が出ている。

学生の感想：

学生の感想は概ね好評である。今回の場合、参加したことを後悔する学生は皆無であり、全員が後輩に参加を勧めており、この企画の継続を希望している。不満な点としては、1日6時間中国語だけの授業は精神的にも肉体的にも負担が大きすぎることに、自由時間が少ないこと、ホテルが勉強に向かないこと、他のツアーにくらべ割安感のないことなどをあげている。

問題点：

最大の問題点は、参加する学生の質の変化である。以前は中国一辺倒、中国に深い思い入れのある学生が参加したものであったが、最近では世界の一つ、one of themとして中国を考えている学生が増えてきた。彼らは今年も中国、来年はヨーロッパと世界各地を体験するのである。それ自身は評価されるべきかもしれない。また、改革開放後、中国と日本の差異が縮まり、大した心構えなく参加する学生も増えた。その結果、十分な準備、心構えなく現地に来てしまい、自由時間の使い方が分からず、教官にどこへいけばいいのか尋ねる、バスや列車の車窓の風景に興味なく寝ている、夜遊び不摂生で体調を崩す、授業を遅刻・欠席する、日本の若者の生活感覚をそのまま持ち込む、といった形に現れ、先方にもはなはだ不愉快な思いをさせた。

二つ目は教官の負担である。3人ローテーションで、夏春に3週間近く割かれるのはつらい。また、費用の捻出先にも苦慮している。

三つ目は参加者の減少である。一時の中国ブームが去り、“異国”としての魅力も少なくなったことに加えて、昨今の不況で毎年参加者は減少しており、ツアーを維持するのが困難になっている。この語学研修旅行を中止するか単位化などの方法を探り存続するか岐路に立っている。

第195回 1998年12月16日
「外交のアウトサイダーとして
——アメリカ合衆国における
女性外交評論家の歩み——」

前田真理子

1920年、参政権の獲得とともに、外交の世界に進出した女性は少なくなかった。外交官試験に合格して職業外交官となった者、国務省官僚として徐々に昇進を重ねていった者から、政治的任命を受けて大使となった者まで、早くも20世紀前半には、様々な運命を選び取った女性たちがいたことは、画期的といえよう。

しかしながら、こうして外交政策に関与するようになった女性たちに先駆けて、19世紀、外交評論家として活動した女性たちがいたことを忘れてはならない。彼女たちの多くは、社会的な地位および名声、あるいは経済力や政治的なコネクションなど数々の特権に恵まれた白人中流階級以上の女性たちであった。数々の類似点が見られるにもかかわらず、彼女たちは多様な主張を持ち、多角的な議論を繰り広げた。ジェンダーと外交の関連を論じる上で、彼女たちの存在を無視することはできない。本報告では、リディア・マリア・チャイルド (Lydia Maria Child)、ジェイン・キャズノー (Jane Cazneau)、アナ・エラ・キャロル (Anna Ella Carroll)、ルシア・トゥルー・エイムズ・ミード (Lucia True Ames Mead) をとりあげた。

女性外交評論家の歴史的意義は、大きく二つ挙げることができる。第一に、政治史的観点から、女性の政治進出が阻まれてい

た時代に、大規模な署名運動や新聞・雑誌などにおける著作活動など、一連の“前政治的”行為を通して、女性が意思表示をおこない、政策へ影響を及ぼすことを試みたという点である。選挙権・被選挙権という直接的な参政手段を持たなかった女性たちは、それに代わる政治参加の方法を編み出さなければならなかった。こうした女性たちの意識の根底には、市民としての自覚があり、政治を担うべき義務と権利の認識があった。この時代の女性たちは、参政権の有無という線を描いて、男性とはまったく異なった政治文化を形成していたといっても過言ではない。

第二に、社会史的観点から、ヴィクトリア調的価値観が支配していた19世紀アメリカ合衆国において、外交という最も女性に不適合とされた問題に正面から取り組んだ女性たちがおり、その女性たちの存在を許容する社会があったという点である。読者層を形成するのは、白人中流階級以上の男性が中心であり、また外交評論とは、男性外交官や官僚、政治家が打ち出した政策を議論する作業を意味していた。女性外交評論家の活動は、“女性の領域”を逸脱したものであっただけでなく、“男性の領域”を侵蝕するものになりえたのである。自ら白人中流階級以上の女性であった女性外交評論家たちは、人種と階級によって規定される“女性らしさ”の束縛を受けてはいたが、政治的・経済的・社会的な特権を駆使して、非難をまぬがれていた。また、社会的にも、こうした女性外交評論家たちの存在は、一種の変異としてみなされ、その危険性が糾弾されることはなかった。

第三に、女性史／ジェンダー史的観点から、女性外交評論家たちの議論が、フェミ

ニズムに見られる平等主義的要素と差異主義的要素を内包していたという点である。すなわち、女性と男性は根本的に同質であるから平等に扱われるべきであるという主張と、女性には男性とは異なった特質があるからこそ着目されるべきであるという主張が、外交評論に影響を及ぼしているのである。キャズノーやキャロルに代表される前者は、アメリカ合衆国の帝国主義的／拡張主義的スタンスを支持し、海外に勢力を広げ、軍備を増強することを訴えた。それに対して、チャイルドやミードのような後者は、前者の主張と真向から対立したうえで、平和の担い手として女性を重視した。また概して、前者は、女性参政権運動の意味を否定し、後者は、参政権運動に積極的に参加する傾向があった。

むしろ、こうした女性外交評論家たちの声は、直接的な影響力に恵まれることはなく、実質的に外交政策を決定するようなことはなかった。政界に直接関与する権利も、いわんや外交における実質的な経験もなかった彼女たちは、所詮アウトサイダーだったのである。にもかかわらず、女性外交評論家たちの存在は、政治から阻外された者たちの歩みを考えるうえで、非常に重要である。様々な社会のおよび文化的拘束を受けながら、なお政治への参加を模索した活動は、実質的な効果よりも、思想的な意義をもって評価されるべきであろう。

第196回 1999年2月24日

「„Ostalgie“ などについて」

諏訪 功

1989年の壁の崩壊、1990年のドイツ統

一以来、約10年の歳月が流れ、この変動の過程でさまざまな語が生まれた。あるいは消え、あるいは残ったこれらの語のうち、いくつかのものについて、お話ししたい。雑談の域を出ないことを、予めお断りしておく。

まず表題に出てくる „Ostalgie“ であるが、これは、実在しない語である。この語は Jürgen Schiewe の論文: „Sprachwitz – Sprachspiel – Sprachrealität. Über die Sprache im geteilten und vereinten Deutschland“ (Zeitschrift für germanistische Linguistik 25, 1997, S. 129-146) で知った。語研のメンバーの一人は、飽くことなき探究心に駆られて調査を重ねた末、ついに OED で同じつづりの語を発見したということである。予想もしていなかった徹底性の発揮には賛嘆を禁じえない。おそらく Ostealgie 「骨痛」という医学専門用語の英語つづりだったと思われる。しかし、東西ドイツの統一という文脈で用いられる „Ostalgie“ は、「骨」を意味するギリシア語系の語群に属する語ではない。

周知のごとく、1949年、東西緊張の真只中、以下の二つのドイツ国家が生まれた:

西ドイツ: 「ドイツ連邦共和国」 Bundesrepublik Deutschland, 略称 BRD
東ドイツ: 「ドイツ民主共和国」 Deutsche Demokratische Republik, 略称 DDR

西ドイツでは、ドイツ民主共和国を一般に Ostdeutschland と呼んでいた。人によっては オーダー・ナイセ以東の旧ドイツ領をも視野に入れ、Mitteldeutschland 「中部ドイツ」と呼んでいたようである。またドイツ民主共和国の存在自体を認めた

くない立場から、マイナスの評価を含むさまざまな言い換えが用いられた (たとえば die sogenannte DDR 「いわゆる DDR」, 括弧つきの „DDR“ など)。しかし統一後は「東ドイツ」という名称にこだわりがなくなり、もっぱら地理上の位置を表す意味で、旧ドイツ民主共和国の領土をこの名称で呼んでいるようである。

ところで統一とはいうが、東は5州、西は11州という州の数からもわかるように、けっして対等の統一ではなかった。むしろ西ドイツによる東ドイツの「併合」というべきかもしれない。この点に関しても、Schiewe の前掲論文にある一つの言葉遊びを紹介しておきたい。それによると東西ドイツ統一は BRDigung der DDR と称される。これはもちろん二つの国の略称: BRD と DDR を、動作名詞を作る後つづり -ung および属格化を利用して結びつけたものであり、「DDR の BRD 化」と訳せる。しかし BRDigung は、Beerdigung 「埋葬」と音がほぼ一致する。すなわち BRDigung der DDR は「東ドイツの西ドイツ化」であると同時に Beerdigung der DDR 「東ドイツの埋葬」であるということになる。

統一直後の興奮からさめ、さまざまな分野においてなかなか縮まらない東西格差、依然として高い失業率などの現実に直面して、旧東ドイツの人々の間では、DDR 時代に対して漠然とした「郷愁」を感じる向きもあるらしい。表題の „Ostalgie“ は「郷愁」Nostalgie と方位名 Ost をかけた言葉遊びである。

方位名といえば、統一後の一時期、旧西ドイツの人々を Wessi, 旧東ドイツの人々を Ossi と呼んだことが思い出される。統

一後、人々は東西の別なく Bundesbürger「連邦市民」となったが、これを Bussi と呼ぼうという冗談半分の提案（Bussi は Kuß「キス」の方言）はついに実現しなかった。しかし Wessi と Ossi は今でも用いられるようである。

ところで、方位を利用した言葉遊びといえ、Weste「チョッキ」に対する Oste「逆チョッキ」を作りだしたクリスティアン・モルゲンシュテルンがすぐ頭に浮かぶ。ここでは West「西」対 Ost「東」という方位の対立から、Wessi 対 Ossi という単純な造語の域を越えて、いささか込み入った筋道で新しい語が生みだされている。まず Weste「チョッキ」は、West-e と分解され、ここから West という方位が読み取られる。ここから「西」と対をなす方位 Ost「東」を連想し、Weste と語形を合わせて Oste を作り出す。逆にこの語を聞く人は、Oste から Ost「東」を聞き取り、ここからさらに West「西」を連想した後、Oste という語形から Weste「チョッキ」に至るという過程を辿らなければならない。

Ostalgie は比較的単純である。まず方位とはまったく関係のない Nostalgie が、N-ost-algie と分解され、Ost「東」という方位が読み取られる。この Ost を明確に表すため、語頭の N- が取り去られ、Ostalgie が残る。新しい語は、方位の「東」を中心語義として前面に押し出しながらも、語形の類似によってもとの Nostalgie との関連を保ち続け、結果として「東」と「郷愁」という二つの語義を同時に連想させる新しい語が成立することになる。

BRDigung der DDR に関しては、be, er, de という略語の音から、beerdigen という動詞の語幹音を聞き取ったことが、この言

言葉遊びの出発点になっている。

以上の言葉遊びは、ソシュールの用語を用いれば、いずれも言葉の連合関係に基づくものである。Nostalgie が N-ost-algie と分解され、そこから方位の Ost が浮かび上がってくる例のように、あるいは Weste が West-e と分解され、そこから浮かび上がってくる方位 West がさらに対立する方位 Ost を呼び寄せる例のように、日常、何の疑念もなく使っている語の緊密な結合が緩み、(プレヒトの言葉を使えば) 異化される。BRD という略語の不透明な音でさえ、シニフィアンの連想から beerdigen との連合を生むのである。

このような言葉遊びは、言語の表層にかかわる浅薄な駄洒落に墮ちる可能性があるとともに、批評精神の現れであることもある。さらに根源的には、日常言語に対する懐疑、これによって支えられている世界に対する懐疑の表現であることもある。

実際上の立場からは、シニフィアンとシニフィエとの対応が 1 対 1 であることが望ましい。一つのシニフィアンが、いわば星座の中心として、さまざまな連合関係によって他の多くの語を自らに引き寄せるといふ比喩は美しいが、このようなことでは情報の伝達は著しく阻害される。しかしわたしは、伝えられるべき内容とともに、それを伝える言葉の形、姿にも同等の重要性を認めるし、情報を伝達すれば、その伝え方は二次的であるという考え方はとらない。今、内容と表現が乖離していると思われるさまざまな言葉、たとえば「二十一世紀に向かって開かれた大学」、「発信型の外国語教育」等々が、大学内外で喧伝されている。このような時、批評精神（と遊び心）を働かせてその実質を見直すことができるのは、

おそらく誰よりもまず、ここに集まった語学、文学の専門家たちだろうと思う。ささやかなエールを最後に送って今回の雑談を終わりたい。